

フェンスの中のアメリカン

—沖繩の米軍基地内で学び、働く青年のケース・スタディ

琉球大学 野 入 直 美

はじめに

本稿では、沖繩の米軍基地内で教育を受け、現在も基地内で就労しているひとりのアメリカンの青年の生活史を詳述する。その前に、アメリカンという用語について、簡単に概説をしておきたい。

アメリカ人とアジア人の両親を持つ人を意味するアメリカン(Amerasian)という言葉は、ヴェトナム戦争の後にヴェトナムに残された、米兵を父親に持つ子どもたちの過酷な状況がアメリカ合衆国で社会問題としてとりあげられる中で一般化してきた。ただし、アメリカンの子どもたちは、戦時下だけでなく、平時における米軍のアジア諸国への駐留によって生まれ続けてきた。日本では、在日米軍の約75パーセントが集中する沖繩で、毎年、約260人の、アメリカ人の父親と日本人の母親を持つ子どもが生まれている。また、海外で出生し、母親に連れられて沖繩に移動してくる子どもたちもいる。父親が現役の米軍人・軍属である場合、子どももその家族として日米地位協定によって保障された身分、SOFA (Status of Forces Agreement) となり、外国人登録の対象から外される。統計的に正確な人数は、不明である。

アメリカンは、上述した経緯から、戦争あるいは米軍基地の「落とし子」として、例えば、沖繩の基地問題を象徴する存在として報道されることが多かった。しかし現実には、彼らの父親にはすでに米軍を除隊し、外国人登録をして沖繩社会に定住している人々もいる。

アメラジアンスクール・イン・オキナワ (AmerAsian School in Okinawa、以下 AASO と表記) は、1998年に、アメラジアンの母親たちによって設立された民間の教育施設であり、現在は NPO となっている。このスクールは、英語表記の AmerAsian の二つの大文字の A に象徴されるように、アメリカとアジアの言語・文化を等しく尊重し、共に学ぶ、「ダブルの教育」を提供してきた。幼稚園から日本の中学校にあたる学年の生徒たちを受け入れ、定員は合計で65名である。

日本国内ではほとんど全く用いられていなかった「アメラジアン」という言葉をスクール名に冠したのは、ひとつには、それまでの「国際児」という行政用語が、日本国籍しか持たないアメラジアンの子どもを除外してきたことから、米国籍のみ、日米両国籍、日本国籍のみを持つすべての子どもたちを包み込む言葉として選んだという理由がある〔セイヤー 2001: 81〕。もう一つの理由は、他のアジア諸国のアメラジアンと、将来的に国境を越えたつながりが持てないかという展望であった。ちなみにこの展望はすでに実現し、韓国の教育施設であるアメラジアン・クリスチャン・アカデミーとの交流が行われている〔野入 2001:144〕。

AASO の設立は、公立学校やインターナショナル・スクール、すなわち米軍基地のフェンスの外側で、適切な学びの場を持つことができなかつたアメラジアンの子どもたちの存在を、社会的に顕在化させた。そこに通う子どもたちのほとんどは、父親がすでに除隊・退役していたり、両親が離婚していたりして、基地内にある軍人・軍属の扶養家族のための学校、DoDDS (Department of Defense Dependents School)^{*1)} の無償教育を受ける権利を失っている子どもたちである。

他方で、沖縄に居住するアメラジアンの全体からすると少数であるが、米軍基地内で DoDDS に通っている子どもたちもいる^{*2)}。彼ら、現役の米軍人・軍属を父親に、日本人女性を母親に持つ子どもたちは、家庭や学校でどのような言語で会話し、米軍基地のフェンスの内と外でいかなる仲間関係を結び、自分自身の属性について、どのようなアイデンティティを持っているのだろうか。無償で英語教育を享受できるフェンスの内側には、

AASOに通ういくらかの子どもたちが体験してきたような、いじめ、アイデンティティの葛藤、コミュニケーションをめぐる困難さなどは存在しないのだろうか。

本稿は、これらの問いを解き明かしていくための試論である。ここでケース・スタディを行う23歳の青年、ケンリックさん(仮名)が経てきた体験と、それを自分なりに意味づけてきた当事者による解釈は、アメラジアンをめぐるもう一つの物語であり、フェンスの外側とは異なったアイデンティティ葛藤、家族や友人との関係性について、豊かな示唆を与えてくれる。

本稿でアメラジアンという用語を用いるのは、一つには、それが少なくとも沖縄社会においては一定の認知を得てきた用語となっているからである。さらに、これまで筆者がAASOを中心として焦点を置いてきた、フェンスの外側のアメラジアンとの比較を行っていくことを念頭において、分析的な概念として用いている。フェンスの内側のアメラジアンの体験や意識についてのケース・スタディは、これまでほとんど行われていない。本稿では、まず、フェンスの内側にいる一人のアメラジアンの青年が体験してきたことの記述に専心し、フェンスの内と外のケース比較は、今後の課題としたい。

I. アメラジアンの青年のケース・スタディ

1. 調査の方法とプロフィール

筆者は、琉球大学法文学部の2003年度の社会学実習で、沖縄における日系人・定住外国人の生活史のインタビュー調査を行った³⁾。学生・院生とともに、アメリカ人、台湾人、日系ペルー人、日系ブラジル人を対象として、合わせて45名の聞き取りを行ったのだが、そのアメリカ人対象者の中に、本稿で取り上げるケンリックさんがいた。インタビューは、沖縄県内で、日本語で行われた。

ケンリックさんは調査時23歳、母親は沖縄女性、父親はアメリカ人で、合衆国の南部出身であった。ケンリックさんがハワイで生まれたとき、父

親は現役の海兵隊員で、転勤のため沖縄、アメリカ合衆国本土、再び沖縄と、6年あるいは2年周期で、住まいを転々とした。最初に沖縄に来たのは2歳、次に来たのは13歳で、DoDDSで中学・高校を卒業し、一度、米軍基地の外で働いた後、現在は、基地内の福利厚生施設で就労している。父親はすでに米軍を退役し、外国人登録を行い、定住アメリカ人として沖縄に住み着いている。彼は、妻の実家がある地域で、妻と共に自営業を営んでいる。

ケンリックさんは、アメリカ国籍しか持っていない⁴⁾。沖縄に移住してきたときは、現役の米兵である父親の扶養家族として、また、父親が退役した後には自分自身が基地内労働者となったために、SOFAの身分となっており、外国人登録の対象外である。彼は、日本に定住する心積もりでいるのだが、基地内で働き続けるかぎり、帰化する方途は存在しない。日本の帰化制度は、申請者の外国人登録を前提としているためである。

2. ケンリックさんのケース・スタディ

(1) 両親の国際結婚

ケンリックさんの両親は、結婚するにあたって、それぞれの親から強く反対されたという。そこには、戦争の体験が直接に影を落としていた。

「お母さん（のお母さん）が、（アメリカ兵と結婚するなんて）裏切られた、みたいになって、出て行け、って。父さんの父さんも、すごいアメリカ人で、第二次世界大戦にも出て（参戦して）、日本に対しての考えがすごい小さかったから、日本人と結婚するなら出て行けって。どっちもそういう状態になったんだけど、今は二人がほんとに愛し合って、ここまでやってきてるっていうのをどっちの家族も見ているから、許して、もう全然、問題ない。」

特に2度目にケンリックさんの父親が沖縄に赴任したのは、妻の強い希望があり、自分自身も沖縄が好きだったからであった。しかし、父親が最

初に親戚づきあいとして法事に参加し、仏壇に祈る所作である「ウートー トー」をさせられたときには、キリスト教徒の父親には抵抗があったようだと言っている。しかし、今ではむしろ「そろそろ法事に行かないといけないんじゃないって、お父さんのほうがお母さんに言う状態」だという。

両親の文化が違うことは、今でも毎日、実感する。

「いいところもいいんだけど、どっちも。悪いところもどっちも悪い。で、その間に挟まってる自分も、たまに、複雑な気持ちになる。長い目で見れば、得したなっていう部分もある。お父さん、基本的にクソまじめで、やっぱり兵隊30年やってたから、もう、言われた通りしかできない。お母さんは逆に、いろいろ学ぼう、学ぼうとして、いろんな方向から、何かを攻める（アプローチする）。で、この二つの意見でぶつかったりとか。」

（2）家庭での言語と現在の使用言語

ケンリックさんは、2歳から沖縄に住んでいたときには、かたことの日本語やうちな一口を話していたという。しかしアメリカに戻ると、母親が家庭内で英語しか話さなくなり、ケンリックさんの日本語やうちな一口のボキャブラリーはすべて忘れ去られた。ただし、母親は子どもを叱るときはうちな一口が出たらしく、ケンリックさんは「お母さんが怒っているとき」のボキャブラリー、「やなわらばー！」（悪い子だ！）などは豊富に持っている。

ケンリックさんが日常会話で困らないレベルの日本語を習得したのは、DoDDSを卒業した後、一度、米軍基地の外で就労したときである。それまでは、「普通の外人さんがわかる日本語くらい」しかわからなかったという。就労した業界の用語を丸暗記する形で日本語を覚えたので、最初は「妙な言い回しをする人」になっていた。今は、ひらがなとカタカナ、簡単な漢字は読めるが、難しい漢字は読めないし、新聞程度の日本語の文章を読むことはできない。現在は、基地内で就労しているため、日常的な使

用言語はすべて英語である。

英語を話せることで、沖縄で生活していて有利だと感じるのは、基地内で働けることだという。また、九州・沖縄サミットの折に、英語の通訳ができたことも挙げられた。

日本語が話せるようになって、有利だと感じるのは、「文句が聞き取れるようになったこと」、日本人の恋人と、字幕スーパーのないアメリカの映画を観るときに解説してあげられること、日常生活の中で、外国人が困っているのを見かけたら、通訳して助けてあげられることが挙げられた。

インタビューはすべて日本語で行い、彼は質問を聞き取るのも、自分が話すのも、全く困難を覚えているようには見えなかった。それでも彼は、インタビューの冒頭で、「たまに外人になるからごめんね」と、笑いを含んで、あまり込み入った日本語だとわからなくなるかもしれないことを伝えている。

ちなみに、後述するが、「外人」と呼ばれてじろじろ見られることは、かつて、ケンリックさんに非常な不快感を与えた。今、彼は、そういったことを乗り越えたという自信に裏打ちされて、「たまに外人になる」という表現で、自分自身のことを、微笑を含んで話してくれたように思われる。

(2) なんで俺がハーフなの？ーフェンスの中のアイデンティティ葛藤と「ハーフ語」

ケンリックさんは、アメリカ合衆国と沖縄の両方に定住した経験を持っているのだが、その両方で、周囲から属性を決めつけられたり、否定的に扱われたりする体験をしている。

「若いときにはむかつくというか、なんで俺がハーフなの？なんでこんな状況に？って子どもの頃はよく思ってたんですよ。アメリカにいたら日本人で、ジャパニーズゴーホームって（言われたり）。…アメリカも好き嫌いあるし、父さんアメリカの南部だったから、行ったら（自分の見た目は）

日本人でもないし、ヒスパニックって言われるし、お前メキシコから来たの？とか。大きな問題はなかったけど、細かいのが毎日毎日、重なって、すごい嫌だった。メキシコに帰れ、とか。」

「沖縄に来たら、おばあちゃんのおうちとか行ったら、そこらへんの人たちにも、外人、外人言われて、どっちもどっちじゃんって。今は、そんな弱い自分（を乗り越えてきたこと）が力になっているから、逆に何でも乗りきれる。」

ケンリックさんが、「外人」と決めつけられ、嫌な気持ちになってしまう「弱い自分」を乗り越えたときの一つの支えは、沖縄の米軍基地内のDoDDSで見出した、「ハーフどうしのつきあい」であったように思われる。彼らは「ハーフ語」という、日本語と英語を混交させた言い回しを使って、アメリカ人と日本人の両方を、意図的に“煙に巻く”のである。

「ハーフどうしのつきあいも一応、ある。よくハーフどうしで、ハーフ語っていう言葉があるんですよ。半分、英語しゃべって、半分、日本語しゃべって。日本人が周りにいても、何しゃべってるかわからない、アメリカ人がいても、何言ってるかわからない。よくこんなハーフ語でしゃべったりとかして、こんなのが楽しいですね。“Look at the チンピラー”とか。“Look at”まではわかってても、“チンピラー”で、「はあ？」みたいな。先生の前で悪い言葉でしゃべっていると怒られるから、そこは日本語に代えてみたり。」

「ハーフ」の子どもたちは、両親がアメリカ人である他の多数派の子どもたちと入り混じりながらも、彼らどうしの親密な関係を持っていた。それについて、ケンリックさんは、両親がアメリカ人の子どもたちとの、経験知の落差を指摘している。

「(両親がアメリカ人の子たちとハーフの子たちは) ある程度は混じってるけど、ある程度は離れてる。自分なんか乗り越えたのと、この人たち(両親ともにアメリカ人の子どもたち)が乗り越えたものと、だいたい、違うから。普段の遊びになると、自分なんかと同じくらいの経験。でも、学校の遊びは誰でも出来る。外に行くと、この人たちより自分たちのほうが。」

「ハーフ」の子どもだけが経てきた経験とは、例えば「沖縄とアメリカ、お前はどっちにつくんだ」と、見知らぬ他人から突然に二者択一を迫られるような、アイデンティティをめぐる体験である。ただし、「ハーフどうしのつきあい」においては、それらの体験について直接、お互いに相談するといったことはなく、むしろ彼らは「ハーフ」どうしですつるんで、多数者たちを笑いのめし、アメリカ人の両親を持つ子どもにはまねのできないクールなやり方で、教師の権威をかいくぐってみせるのである。

「一回、小学校6年生ぐらいのときに、いまだに(今までの人生で)一番、馬鹿な質問されて。自分が公文(式教室)から(基地へ)戻る途中に呼び止められて、やー(お前)、ハーフだろー、もし明日、沖縄とアメリカが戦争になったら、お前、どこ選ぶ?って。そんな質問、聞くな。意味は?答え出しても、意味、ない。」

「アメリカ人って意識することは、あまりない。(自分が)ハーフってわかっているから、それでいい。でも、逆に周りからよく決めつけられる。外人だからいばってるでしょー、とか。普通に歩いているのに。外人も、あんたは外人の真似して、とか。いまだに、こんなこと、ある。」

DoDDSの高校を卒業すると、同級生のほとんどは、進学や就職のために合衆国に移動した。ケンリックさんは、自分の夢をかなえるために沖縄に残って基地の外で就職し、日本語を特訓し始める。自然な成り行きとし

て、アメリカ人の友達が急減し、代わって日本人の友達が増えていった。その後、最初に就職した業界では夢が実現できないことがわかり、基地内で就労することになった。一番親しい友達の一人に、フィリピン系の「ハーフ」がいるが、DoDDS 時代のような、「ハーフどうしのつきあい」は残っていない。

（3）自分のラベルは「自分でつける」－アイデンティティの自己決定

ケンリックさんは、自分自身のことを、「ハーフ」、時には冗談交じりに「外人」と言う。彼にとって、「アメラジアン」という言葉は、最初、きわめて否定的に受け取られていた。

アメリカ合衆国では、エスニック・モニタリング、すなわち白人、ヒスパニックなどのエスニック・グループごとに、子どもの成績などがどのように異なるのかを調べるための調査が行われている。ケンリックさんが初めて「アメラジアン」という言葉に出会ったのは、そのエスニック・モニタリングの一環として、学校で学力試験を受けるたびに、解答用紙に、自分のエスニシティに丸をつけよという指示があり、新しいカテゴリーとして「アメラジアン」が導入されたときであった。

「若いときはむかついた。お母さんが沖縄の人だから、日本人？って言われたら、違うって。でも、これも悪気で言うわけじゃないし。言葉で言えば、アメリカンとアジアンのハーフだから、アメラジアンであってるから、昔、怒った自分が悪かった、子どもの頃。学力試験を受けるときに、あなたは何人ですか、ホワイト、ヒスパニック、ブラックとかそんなのがあるから、中学ぐらいになってアメラジアンって出てきて、あと Others、その他。これで、俺のテストがなにか変わるの？って。だから、最初は、そういう風にアメラジアンの言葉に入れられたから、最初は（アメラジアンという言葉は自分にとって）ネガティブだった。」

アメリカ合衆国では「ジャパニーズ」「ヒスパニック」、沖縄では「外人」としばしば決めつけられてうんざりしていたケンリックさんは、そもそも学力試験でエスニシティが問われることが疑問であった。さらに、白人でも日本人でもないからといって、「アメラジアン」という奇異な新分類に「入れられる」ことは、不快以外の何ものでもなかった。

周りから何かの分類に「入れられる」ことの不愉快さをたっぷりと味わってきたケンリックさんは、やがて、自分の呼び方は「自分でつける」という、アイデンティティの自己決定というスタンスにたどりつく。そこで彼は、もともと否定的な意味で押しつけられてきた「あいのこ」というラベルの意味を、自分の力で逆転させるのである。

「子どもの頃に、ちょっと嫌だったのが、沖縄ってハーフは「あいのこ」って言うじゃないですか。最初、嫌だったけど、親とか見てたら、ほんとに愛でできた子どもだから、悪くないなあって思って。で、お母さんに（自分が）“愛の子”だっていう話をしたときに、この言葉は、お母さんが言える言葉でもない、お父さんが言える言葉でもない、ハーフの子にしか言えない言葉。ハーフの子の生き方で、この言葉の意味が変わるって。漢字でこう書けば、愛の子どもだから、逆にいい風に考えれば、いい風に聞こえる。自分で自分を言えること。で、どうせあいのこなんだっていうラベルがつくなら、自分でつける、って。」

ケンリックさんは、「愛の子」という言い方を、日常の会話では用いない。「愛の子」というラベルは、他者に向かって誇示されるのではなく、彼の内部で、彼を支えているように思われる。

「自分で自分を言えること」というスタンスにたどりついた後も、しばしば、沖縄社会の中で自分が異物であること、歓迎されざるよそ者であることを思い知らされるできごとが起こる。

「例えば、クラブ行ったら、外人さんの多いクラブに行ったら自分がどう

いうふうに踊っても全然、問題ない。けど、日本のクラブに行ったら、自分がちょっと大きく動きすぎたら、逆に引く人たちもいるし、座りに行く人たちもいるし。」

「自分がショッピングセンターで歩いていると、大体、警備が後ろから来る。で、スーパーで買い物してるときでも、大体、警備が見えるところにいる。これはもう、見た目で見てるから（外見で、若いアメリカ人の男は問題があると判断しているから）。全然そういう気はなかったのに、何でここまで追ってくるの？って。」

そのとき、ケンリックさんが採用するのは、「行動主義」とも言うべき生活原則である。そこには、見た目で前もって人間を判断することの愚を、自分自身はきっちりと避け、イメージや先入観ではなく、自分の経験を信用するというハビトゥスも含まれている。

「やってみせる。（文句を）言う前にやってみせる。ああこう言う人と、黙ってやってその後には話す人と、全然違う、雰囲気も。あと、経験でものを決めていく。経験が自分の力になるから、この次の判断に、この経験のおかげで今度の判断がまた楽になったりとか。」

II. 考 察

1. フェンスの内側にいるのは「特権的なアメリカン」か？

国境を越えて人々が自由に行き来する時代に、高いフェンスで囲われた米軍基地が、私たちの地域社会の真ん中に存在する。フェンスの中で学び、働くアメリカンがいる一方、フェンスの外側には、アメリカ合衆国に旅行に行くことはできるかもしれないが、一生、フェンスの中に入ることのできないアメリカンがいる。

米軍基地のフェンスの外側にいるいくらかのアメリカンは、シングル・

マザーに育てられている。すべてのアメラジアンがそうなのではないが、父親の顔を知らなかったり、会う人ごとに「英語しゃべれる？しゃべれないの？ハーフなのにもったいないね」と、同情の目で見られたりするアメラジアンがいる。AASOは、わが子に、自分に誇りを持って生きてほしいと願う、シングル・マザーたちを中心に設立された。厳しい財政難とアメリカ人教師の人材不足に悩まされながら、フェンスの外でバイリンガル教育を提供するAASOの中から見れば、あるいは、公立学校で学んだ成人アメラジアンから見れば〔重松 2002:166〕、ケンリックさんのような、両親がそろっていて、二人とも沖縄社会に定住していて、当然のように英語教育を受けて、今は基地で働いて、日本語の会話もできて、という人などは、ため息が出るような「特権的なアメラジアン」にうつるかもしれない。

しかし、米軍基地のフェンスの中で学び、働くアメラジアンの青年が、アメラジアンが直面する困難や葛藤からは隔絶している特権的な存在かという点、否である。

確かに、英語教育の機会という点についてフェンスの内と外を比較すれば、そこには大きな格差が存在する。沖縄で、米軍基地内のDoDDSを訪問した日本人は、その広大なキャンパスと教育施設の充実ぶりに、目を見張ることであろう。英語だけですべてのコミュニケーションが行われ、卒業生のほとんどがアメリカ合衆国に移動するその学びの場は、まぎれもなくアメリカン・スクールである。同じ英語教育を提供する教育施設であっても、合衆国国防省の学校であるDoDDSと、民間の教育施設であるAASOとでは、そもそも、予算や学校の規模が全く異なる。

英語教育で培われた語学力は、基地内就労の機会を増大させる。ケンリックさんも、英語が話せることの有利な点として、第一に、基地で働けることを挙げている。沖縄で、基地で働くことの社会的な意味は、おそらく神奈川県などの他の都道府県におけるそれとは、全く異なっていると考えられる。沖縄では、製造業をはじめとする産業基盤が脆弱で、雇用の機会が限定されており、基地雇用員の現地採用の応募があると、応募人数に数十

倍する希望者が殺到する。基地内で働く機会は、地元の若者にとっても羨望の的なのである。

しかし、視点を変えてみれば、沖縄では、基地内で就学したアメリカンの青年が働ける場所が極めて限られていて、基地に依存するより他にほとんど道がないということも言える。ケンリックさんは、一度は基地の外で就労したために、それでも DoDDS の卒業生にしては別格の日本語の会話力は持っているのだけれど、新聞程度の日本語を読めない彼にとって、基地の外では、低賃金のサービス業以外に、雇用の機会はかなり厳しく制限されると思われる。

そして、彼には日本国籍がない。基地内で働き続ける限り、帰化の方途もない。

現時点では、彼はまだ若い独身者で、それほど社会保障に頼る事態も頻発しない。さらに、母親は出身地に戻っていて、地域社会のネットワークを持っている。アメリカ人の父親も、沖縄の地域社会や妻の親族関係に入り込んでいる。このような両親を持つアメリカンは、DoDDS の卒業生の中では極めて珍しいケースであると思われる。逆に、このような両親の存在が、ケンリックさんの沖縄定住を支える要件となっているとも言える。ケンリックさんは、もしものときには、両親の経済資本と社会関係資本を頼りにできるだろう。

ただし、もしも今後、日本人女性との婚姻や子どもの出産、両親の高齢化といった新しいライフ・ステージが展開していくと、新たな困難に直面する可能性がある。現地雇用の基地内労働者は、たとえアメリカ国籍であっても、現地人として、基地内の福利厚生などのサービスを受ける機会が制限されるからである。最悪の場合、ケンリックさんのようなアメリカンは、現地雇用という理由で基地内のサービスも制限され、日本国籍がないという理由で日本社会の市民権からも排除されるおそれがある〔野入 2003 : 20-22、同2004a : 62〕。DoDDS の卒業生はほとんど合衆国に移動してしまったので、沖縄に残っているケンリックさんは、同世代のアメリカ人や、「ハーフどうし」のネットワークのほとんどを失ってしまっている

る。何かあったときには、現在の職場で結んでいる関係が支え、ということになるかもしれない。

フェンスの中のアメラジアンは、フェンスの外側からはときに特権的な存在に見えるけれど、視点を変えてみれば、米軍基地に依存することなしには生活していくことが困難な人々でもある。ケンリックさんは、日本の医療保険や年金などの市民サービスを受けることができず、日本の国籍と学歴を持たず、しかも、米軍基地が提供するサービスからも、現地雇用という理由で疎外されるおそれがある。

2. フェンスの中の「ハーフどうし」の関係性

それでもケンリックさんは、「特権的なアメラジアン」としてではなく、嫌な体験もするけれども、自分のラベルは「自分でつける」という決意を静かに秘めて実行するひとりの青年として、彼自身のやり方で、基地内で働きながら沖縄社会に入り込み、生活していくことだろう。

彼がアイデンティティの自己決定というスタンスに行き着いた背景には、自分が「愛の子」であることを確信させる、両親の姿があった。さらに、彼が DoDDS 時代に結んだ「ハーフどうしのつきあい」という、同世代の仲間によるエンパワーメントがあったのではないかと思われる。

ケンリックさんら、「ハーフ」のやんちゃな若者たちは、「ハーフ語」という武器を駆使して、ハイブリディティ（異種混交性）を逆手にとって、多数者であるアメリカ人たちを、上手に笑いのめしていた。このような「ハーフ」の子どもどうしの親密な関係性や、言語のハイブリッドな使い方は、彼らを取り巻く多数者の人々との相互作用の中でできあがってきたと考えられる。

一方、公立学校に通うアメラジアンの子どもたちのいくらかは、学校や学級にひとりだけ、異質な外見をもつ者として孤立したり、目立たないように気をつけたりしている〔重松2002：179-182〕。公立学校に通う「ハーフ」の子らがつるんで、英語交じりの言い回しで、日本人の子どもたちや教員を煙に巻く、といった状況が生じているとは考えにくい。何がこの違

いを生じさせているのかという問題は、さらにケース・スタディの事例を増やした上で検討することとして、ここでは、現時点で指摘できる相違点を押さえておくことにとどめたい。

ちなみに、AASOの生徒は基本的にすべてアメラジアンなので、そうではない子どもたちとの相互作用は、AASOの内部では起こらない。彼らの話す英語や日本語には、ときどきハイブリッドな言い回しが混ざりこむが、筆者が知る限り、それは周囲の日本人やアメリカ人を煙に巻くといった意図を持って、トリッキーに採用される言い回しではない。

DoDDSとAASO、そして公立学校におけるアメラジアンの子どもたちの仲間関係とハイブリディティの比較分析は、稿を改めて進めることとしたい。

3. フェンスの内と外に共通するもの—浮かび上がるホスト社会の課題

フェンスの内と外で、アメラジアンが共有している体験は何だろうか。

確かに、ケンリックさんは、公立学校からAASOに移ってきたいくらかの生徒が経てきたような、暴力を含んだ激しいいじめや排除〔セイヤー 2001:100-107〕を体験していない。しかし、彼もまた、自分を勝手な分類に入れこみ、「外人」と決めつけてくる周囲の圧力を感じ、葛藤してきた。

そして、フェンスから外へ出たとき、ケンリックさんは、AASOに通ういくらかの子どもたちが体験しているような社会的な排除、例えばショッピングセンターで、警備員に尾行され続けるといった経験をしている。それは、外見や言語・文化の違いが引き金となる偏見を含みつつ、それよりはむしろ、沖縄社会における米兵に対する警戒心や敵意に根ざしていると考えられる。特に若いアメリカ人男性を徹底してマークするという警備は、現実に米兵による事件や事故があとを絶たないために、行われている。皮肉なことに、実際に不信と警戒の目で監視され、時には商業施設から排除されたりするのは、フェンスの内側で安価な買い物ができる現役の米兵よりも、軍隊を退役・除隊した定住アメリカ人や、沖縄社会に生活拠点を置

くアメリカ人なのである。米兵の引き起こす問題、その背景にある、沖縄における在日米軍基地の過度な集中は、アメリカ人への否定的なまなざしへと転化し、彼らと沖縄社会との共生を妨げている。米軍基地を抱えて60年の歳月が過ぎた沖縄には、くつろいだ気持ちでショッピングを楽しむことも、「外人」と言われないで暮らすこともできないでいるアメリカ人がいる。

フェンスの内と外のアメリカ人は、国籍法や帰化手続きなどの制度的な問題にも、共通して直面している。

例えば、日本の国籍法は、日本人の親から生まれれば日本国籍が得られることを原則としているにもかかわらず、海外で生まれた子どもは、しばしばその原則から取りこぼされてしまう。成人後の二重国籍の保持が認められていないことから、アメリカで定住し、その後に日本で暮らし、またアメリカへ、といった行き来をしたり、二つの社会に足場を持って住んだりという、アメリカ人とアジア人の両親をもつアメリカ人なら自然な発想として出てくるであろう〈越境者〉としての生き方は、大きな困難を伴う。ケンリックさんがなぜ日本国籍を持っていないかという、帰化の制度が、SOFA 身分のアメリカ人の存在を全く顧慮していないからである。

4. 〈ディアスポラ〉の“声”から〈私たち自身の物語〉へ

筆者がケンリックさんのインタビューをしたとき、最後に大きく印象に残ったのは、上述したような現実の厳しさよりも、むしろこの人の大きなユーモアの感覚、アイデンティティの自己決定にたどり着いた自分に対する、静かな自信であった。

彼の言葉には、複数の社会を行き来し、それぞれに足場を持ち、あるいはどこにも属さず、複合的なアイデンティティを有することもある越境者、〈ディアスポラ〉の人々の言葉に共通するものがあつた〔戴 1999〕。それは、個人的な物語でありつつ、ホスト社会の内なる多様性を、対立や葛藤、これから起こりうる社会変動への予兆を含めて照らし出す“声”である。

本稿で、それをどれだけ伝えられたのかは心もとない。ただ、私たちはこのケースの魅力を賞味するのではなく、なぜケンリックさんがアイデンティティについて、ことあるごとに考え続けてきたのかを推察してみる必要があるだろう。視点を変えて付け加えるなら、この社会で多数者である人々は、このように、自分のアイデンティティについて、他者との関係について、考えることがあるだろうか。筆者自身を振り返れば、日本人の両親を持ち、日常では、自分のアイデンティティについて改めて考えることは、きわめてまれである。

私たちの社会は、社会的な共生という面において、また国籍や帰化などの制度面で、ケンリックさんのようなアメラジアンが生きている現実、対応できていない。現実への対処が、すべて＜ディアスポラ＞の人々の個人レベルの努力に任される中で、彼らは、ケンリックさんがそうであるように、タフであらざるを得ず、思慮を深めざるを得ない。彼らがアイデンティティについて考え続けているのは、そんなことをほとんど考えもしない、多数者の人々との関係性の反映でもあるのではないだろうか。この稿に続くべきもう一つの物語は、それらのアメラジアンの体験をよそごととして眺めてきた、＜私たち自身の物語＞かもしれない。

ここで言う＜私たち自身の物語＞とは、「アメラジアンについて無理解な、あるいは偏見を持った地域住民」というような形で、あらかじめ固定的に想定される多数者の姿ではない。＜私たち自身の物語＞とは、問題状況を、ディアスポラの人々と多数者の人々との関係の中で構築されてきたものとしてとらえようとするときに見えてくる、動的な相互作用のプロセスである。そこには、葛藤、権力関係、格差、不平等と共に、＜私たち＞と＜彼ら＞との連続性、境界の流動性、＜私たち＞の内部の多様性なども含まれるであろう。

すでに、社会学や、異文化間教育学といった学問領域において、従来の研究が少数者の人々だけに着目してきたことを省みて、＜私たち自身＞を問おうとする動きが始まっている⁴⁵⁾。沖縄のアメラジアンとの関係性という視点で＜私たち自身＞を問う研究は、これらの先行研究の手法と成果を

踏まえながら、展開されていく可能性を持っている。

附記：本稿は、2005年5月の沖縄法政研究所の研究会で報告の機会をいただいた折に、参加者の方からいただいたご質問をもとに書きおこしたものである。報告の機会を与えてくださった沖縄法政研究所の皆様と、質問やコメントを下された方々に記して感謝します。

註

- 1) 合衆国国防省のホームページによると、沖縄を除く日本国内の、在日米軍の軍人・軍属の扶養家族のための学校、すなわち DoDDS は、小学校12校、中学校2校、高校6校である。国防省のホームページは、「日本」と別枠で「沖縄」の学校リストを掲載している。沖縄の DoDDS は、小学校8校、中学校3校、高校2校である。生徒数については、例えば沖縄県内の DoDDS の一つであるカテナ・エレメンタリースクールの生徒数は約1000人であり、かなりの規模のスクールが基地内におかれていることがわかる。アジア太平洋地域における DoDDS についてのウェブサイト：<http://www.pac.dodea.edu>
- 2) 1999年に沖縄県教育委員会が作成した「外国人の子弟及び重国籍児童等の就学状況に関する実態調査結果」によると、日本国籍を持っている児童で、基地内学校に通学しているのは、小学生97名、中学生27名であった。このほとんどは、アメラジアンであると考えられる。ただし、ここには、ケンリックさんのようなアメリカ国籍しか持っていないアメラジアンの子どもたちは含まれていない。ちなみに、公立の小・中学校に在籍する外国人の子ども、及び重国籍児童の数は、小学生が603人、中学生が171人であった。こちらには、日本国籍しか持っていないアメラジアンの子どもたちは含まれていない。また、アメラジアン以外の外国人児童の数が含まれている。この調査は、市民団体「アメラジアンの教育権を考える会」の要請によって行われたものであるにもかかわらず、アメラジアンの子どもたちの就学実態を明らかにしているとは言いがたいが、少なくとも、沖縄県内に居住するアメラジアンの子どもたちの大多数が公立学校に通っているということは推定できる〔照本 2003:7〕。
- 3) この調査は、平成13～15年度文部科学省研究費基盤研究C(2)の研究プロジェクト、「沖縄におけるディアスポラのライフコース：ホスト社会との関係性をめぐって」(研究代表者 安藤由美・鈴木規之)の一環として行われた。その成果は、野入 2004b、2005a、2005b にまとめられている。
- 4) ケンリックさんのように、海外で出生し、日本人の親を持つ子どもは、保護者が出生から3ヶ月以内に、出生届と国籍留保願いを日本大使館あるいは領事館で行えば、日本国籍が保障される。しかし、この手続きについての情報は周知されていないし、それを知っていても、日本国籍は日本に帰ってから手続きをすればよいと考える保護者が多い。実際に帰国すると、

父親が現役の米軍人・軍属であれば、家族も日米安全保障条約によって規定された身分であるSOFAとなり、外国人登録の対象外となるので、帰化申請ができない。その後、ケンリックさんのように、父親が退役しても本人が基地内で働くようになると、帰化申請の方途はほとんど全く見えなくなる。

5) 社会学の領域では、谷 富夫の民族関係論〔谷 2002〕と、それを踏まえて展開された、地域住民を対象とする外国人についての意識調査〔稲月 2002、2004〕がある。近年、日本人の外国人に対する寛容度を問う調査〔松本 2004、鐘ヶ江 2001〕、パーソナルネットワークという視点からの日本人の意識調査〔伊藤 2000、星・石田 2002〕などが、さまざまに試みられている。これらの手法は、質問紙を用いる統計的な調査である。

一方、異文化間教育学会は、2004年から2年間に渡って、「日本人性」に焦点を置いたテーマで特定課題研究を組んだ〔中島 2005: 2-14〕。ここでいう「日本人性」とは、固定的な民族性としての「日本人らしさ」ではなく、＜自文化＞と＜異文化＞、＜日本人＞と＜外国人＞といった二項対立的な図式が、自覚的に検討もされないままに、異文化間教育の研究や実践において構造化されてきたということを改めて問いなおすために、切り口として採択されたものである。筆者は、この特定課題研究において、在日朝鮮人と日本人の「ダブル」の若者を対象とするケース・スタディを行った〔野入 2005c: 42-56〕。

参考文献

- 伊藤泰郎 2000 「社会意識とパーソナルネットワーク」 森岡清志編著『都市社会のパーソナルネットワーク』東京大学出版会
- 稲月 正 2002 「日本人住民の民族関係意識と民族関係量」 谷 富夫編著『民族関係における結合と分離』ミネルヴァ書房
- 2004 「在日韓国・朝鮮人と日本人の民族関係を規定するものは何か—在日韓国朝鮮人が低密度分散居住している地域の場合—」『西日本社会学会年報』第2号
- スティーブン・マーフィ重松 2002 『アメラジアンの子供たち—知られざるマイノリティ問題』集英社
- 鐘ヶ江晴彦 2001 『外国人労働者の人権と地域社会：日本の現状と市民の意識・活動』明石書店
- 戴 エイカ 1999 『多文化主義とディアスポラ』明石書店
- 照本祥敬 2003 「アメラジアン（国際児）の就学状況について」平成12年度～14年度科学研究費補助金（萌芽的研究）研究成果報告書『沖縄におけるアメラジアンの生活権・教育権保障』、研究代表者 野入直美
- セイヤーミドリ 2001 「アメラジアンスクールがめざすもの」 照本祥敬編著『アメラジアンス

クール 共生の地平を沖縄から』ふきのとう書房

中島智子 2005「異文化間教育と『日本人性』」『異文化間教育』22号

野入直美 2001「アメリカンの教育権を考える」照本祥敬編著『アメリカンスクール 共生の地平を沖縄から』ふきのとう書房

—2003「沖縄におけるアメリカンの生活権保障—国際恋愛・結婚法律相談の事例を中心に—」平成12年度～14年度科学研究費補助金（萌芽的研究）研究成果報告書『沖縄におけるアメリカンの生活権・教育権保障』、研究代表者 野入直美

—2004a「アメリカンと沖縄社会—ディアスポラから見るホスト社会としての沖縄—」『西日本社会学会年報』第2号

—2004b「沖縄における日系人・定住外国人の国境を越える移動とエスニック・ネットワーク（上）—アメリカ人、台湾人、日系ペルー人、日系ブラジル人の意識調査から—」琉球大学法文学部人間科学科紀要『人間科学』第14号

—2005a「沖縄における日系人・定住外国人の国境を越える移動とエスニック・ネットワーク（中）—アメリカ人、台湾人、日系ペルー人、日系ブラジル人の意識調査から—」琉球大学法文学部人間科学科紀要『人間科学』第15号

—2005b「沖縄における国境を越えた移動とエスニック・ネットワーク」琉球大学移民研究センター紀要『移民研究』創刊号

—2005c「見えない日本人—在日朝鮮人教育における「日本人生徒」の位相—」『異文化間教育』22号

星 敦士・石田光規 2002「外国人への排他性とパーソナルネットワーク」森岡清志編著『パーソナルネットワークの構造と変容』東京都立大学出版会

松本 康 2004『東京で暮らす—都市社会構造と社会意識』東京都立大学出版会